

新出稀観の常磐津正本『緑増常磐寿』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 有一, 常岡, 亮, 小西, 志保, Takeuchi, Yuichi, Tsuneoka, Ryo, Konishi, Shiho メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/337

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新出稀観の常磐津正本『緑増常磐寿』

竹内 有一、常岡 亮、小西 志保

一 はじめに

平成二十七年（二〇一五）、常磐津家元の九世常磐津文字太夫師の自宅（東京都世田谷区）で、江戸期に出版された常磐津正本（初版の浄瑠璃詞章本）多数が蔵出しされた。その中に『緑増常磐寿』という新出稀観本が存在することが判明した。

『緑増常磐寿』は、常磐津家元代々の記録集『常磐種』（東京藝術大学附属図書館に転写本が現存）や『近世邦楽年表』（東京音楽学校編、常磐津の部は第一巻、明治四五年刊）などの基礎資料に掲載されておらず、正本の所在もこれまでに確認されることがない。しかし、後述する考証により、安永九年（一七八〇）正月に開曲出版された、新発見の歳旦浄瑠璃であることがわかったのである。

『緑増常磐寿』が新年を言祝ぐ歳旦物であることは、後掲する詞章と挿絵によって明らかであるが、大きな特徴は、詞章の中に約五〇名の女流とおぼししい名義が詠み込まれていること、初丁表の常磐津連名に「常磐津右文字太夫」なる初出の名義がみえることである。

このような特徴、詞章内容、開曲者、成立の経緯等を考察することによって、常磐津節および近世邦楽の歴史に新たな見解を提供し得る、価値の高い資料であると考えている。この資料を紹介するとともに基礎的な考察を書き留めることが本稿の目的である。

二 所蔵者と出自

前述のように、資料の所蔵者は、常磐津家元である。平成二十七年の蔵出しに先立ち、今から十数年前の平成一〇年代に、常磐津文字太夫師長男の常岡亮（常磐津小文字太夫、家元後嗣、日本伝統音楽研究センター共同研究員）が、家元の倉庫部屋を整理中に、これらの資料を偶然見つけ出した。

残念ながら、資料の出自については、家元には明確に伝えられていないが、常岡亮が資料と出会った直後に、八世常磐津文字太夫師夫人の常岡一子（故人）から聞いた話によると、詳しい経緯は不明だが戦前から家元に所蔵されていた資料で、ごく一部の者しかその存在を知らなかったという。

常磐津家元の代々は、かつては日本橋檜物町（呉服橋）に居を構え、数々の歴史的資料を所蔵していた。ところが、大正一二年の関東大震災により、代々の肖像画を除いて灰燼に帰してしまった。その様子は、『都新聞』大正一二年（一九二三）九月一六日付「火中から取出した文字太夫一家の宝」などに報道されている通りである。

先代夫人の談話とこの報道によれば、これらの資料は、大正一二年から太平洋戦争の始まる昭和一六年（一九四一）頃までの間に、外部から日本橋の常磐津家元に収められたのではないだろうか。戦争中は疎開先で戦火を逃れ、終戦後は日本橋に戻り、その後は家元の転居を経て、平成二十七年まで家元に秘蔵されていたのであろう。

なお、蔵出しされた資料の中には、江戸期のものとみられる「常磐津家元」の捺印や、江戸期の家元行司「須賀太夫」の署名が余白に書かれた本が多数、合綴された状態で残されている。つまり、おおかたの資料は、江戸期においては常磐津家元が所蔵していたとみられるのである。それが幕末以降のある時期から大正後期までの間は何らかの理由で常磐津家元を離れ、のち再び家元に戻ってきたものであると考えられる。その委細については別の機会に述べることとしたい。

三 調査の経緯

前述した平成二七年の常磐津家元における資料の蔵出しには、常磐津文字太夫師、常岡亮（常磐津小文字太夫）、竹内有一（日本伝統音楽研究センター教授）、小西志保（日本伝統音楽研究センター共同研究員）が立ち会い、資料の概況を確認した。確認された資料は、江戸期に出版されたとみられる伊賀屋版の正本・稽古本、明治期以降に出版されたとみられる坂川屋版の稽古本、さらには歌舞伎出演時に使用したとみられる床本など様々な浄瑠璃本である。

その内、江戸期に出版されたと見られる正本の多くは、四〇丁から一〇〇丁程度の分量をひとまとまりとして合綴され、そのような合綴本が八巻ほど確認された。これらの合綴本の多くは、虫喰いによる損傷（虫損）に見舞われていた。本を開くだけで破損しかねないほど激しく損傷した部分も少なくなかった。

損傷を防ぐため、半開きの状態で大ざっぱに閲覧しただけであったが、withinの正本調査の経験と考証によれば、これらの合綴本の内容は、主に歌舞伎で初演された演目の薄物正本（いわゆる絵表紙正本）と、初版とおぼしい稽古本であることが明らかであった。さらには、初世常磐津文字太夫時代の古正本、新出本とみられる稀観本もみられ、大量の貴重な正本が常磐津家元に

大切に秘蔵されていたことに驚愕せざるを得なかった。常岡亮は、これらの資料と出会った当初から、これらが貴重本であることを悟って丁寧に保管し、研究者の閲覧に供する機会をうかがっていたのであった。

所蔵者の常磐津文字太夫師は、これらの資料の文化財としての価値と調査研究の必要性を理解され、常岡亮・竹内・小西の三名が書誌調査にあたることを許された。調査の対象とした資料は、劇場初演の薄物正本および初版とみられる稽古本が含まれる、合綴本八巻である。前述のように、このうちの五巻は虫損が著しく、閲覧もままならぬ状態であった。まずは本を閲覧可能な状態に修理する方法を検討し、修理と並行して書誌調査を進めることにした。

丁数の多い合綴本の虫損を修理するには、相当の手間と費用が予想されたので、特別な資金の調達が必要であった。いくつかの助成金の獲得を目指し申請したところ、幸いにも、資料の希少性と価値の高さ、資料の利活用の方と予想される成果に一定の評価が与えられたため、京都市立芸術大学特別研究助成（平成二八年度）、科学研究費助成事業（基盤研究（C）、平成二九〜三一年度）を受けることができた。いずれも竹内が研究代表者、常岡・小西が研究協力者をつとめている。

また、これらの助成においては、研究分担者として、京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻の宇野茂男教授の協力を得ることができた。適切な修理方法を学術的に検討しながら、着実な修理を進める筋道が作られたのである。

こうして、資料の撮影とデジタル画像化、浄瑠璃本文の翻刻と解説、修理した正本を活用した復曲を実現するための調査研究を進めることとなった。このような一連の調査研究と本の修理によって、本稿において『緑増常磐寿』を紹介することも可能となったのである。

四 翻刻

常磐津正本『緑増常磐寿』の翻刻を掲載する。本の影印を本稿末に収載した。翻刻の方針は次の通りである。

改行は原本によらず任意に施し、常用漢字の使用を原則とした。へゝ内は割書、「」内は欠損等により推定した文字、□は欠損等により判読不明部分を示す。

同 右歌太夫 三味線
(紋) 常磐津右文字太夫 岸沢九蔵 伊賀屋

同 右多太夫 上調子岸沢右式

〔緑／増〕常 磐 寿 (挿絵)

小松川書 文朝画(印)

(初丁表)

緑増常磐寿 常磐津右文字太夫直伝

歌カ、リかぎりなき合 ハシルためしを引や。鶯の合

はつね諷ふのハル小松川 流れたへせぬ^{切位地}常磐津の合ウ

一ト木のしづ^{文字系枝} ふかキンみどり

文字くに国の春猶すへ^{文字ひさ久に}。

文字まつ松の木ぶりも^{文字ち「か」}周まさり

カハリツキユリ長きよはひは^{文字すが菅の根の}。

カ、リ入江の風にさつゝの。コハしらべ長閑に吹さそふ。

文字みね峰の木立も音そへて

文字なみ波の鼓のシザイ徳若に合詞万歳はやす声々を

〔文字きく〕「菊」のゆかりや福寿草

文字ふさお房合さるさに文字たみ民ゆたか

〔文字そよ〕「曾」世ふくシツメル風「も」〔文字とよ豊年の

〔田〕作「り」初「メ種お」□□

恋の種まく「たねま」くく「良」い文字「なか」〔仲に〕合

文字い□「位」□□□□「文字ぜん」〔膳〕と書おくる合

文字ふで筆の文字「よ」世すがに数々の

おもひを^{文字みわ}三輪の神ならば合

夜毎にかよふ忍び^{文字つま}妻

ハツム合此文字みほ三保かけ文字てつ鉄ゆほども

いつわり^{文字いわ}岩ぬ仰にも合

文字ほの保野くしらむ鶴合文字かね兼に

つたのゑにしと いふしほの合

文字さの佐野の渡りか袖打払ふ

詞たもとを取って コレまたしやんせ合

文字あさ色地朝のきぬぐ引^{文字とめ}登女て

又寝の床の文字みつ美津ぶとん。

文字さと郷にカン流れの合身じやな「け」れ^{文字とも}友。

幾千代過て^{文字その}園さ^{文字き}紀野合

キンかわるまいぞのむつ言に

文字なを直いとしさも^{文字ます}枡かぐみ

文字かつ勝みしまゝに「打」とけて

ツナキ一タ木を^{文字みき}美喜と^{文字つき}継ほして。

結びめかたき。縁の文字つな綱。

長地 文字すま須磨の若木のなれ^{文字そめ}染も

(終丁表)

(初丁裏)

文字ひな雛の合いもせに文字すみ住文字よし芳の

カ、リ夫婦中能諸白髪引

文字しげ繁る榮は文字ちよ千代までも

文字つね常に賑ふ吉左右文字きち吉事

クリ上 文字ひで秀る文字とみ富もゆたか文字なる成

まつに咲そふ文字はな花の春

尽せぬ色こそめでたけれ

(終丁裏)

五 本文の語釈

「ためし」 先例、範例。

「しづ枝」 下の枝。

「ちかまさり」 遠くで見ると近くで見ると見る方がまさっていること。

「お房さるさに」 おうささるさに。あれやこれや。

「豊年」 五穀の実りの良い年。ほうねん。

「此三保かけ鉄ゆほども」 この身をかけて露ほども。

「岩ぬ」 言わぬ。

「保野くしらむ鶴兼に」 ほのほの白む鶴亀に。

「佐野の渡りか袖打ち払ふ」 和歌山県新宮市にあった渡し場。『新古今和

歌集』に「駒とめて袖打ち払ふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ」。

「きぬぐ」 別れ。

「又寝」 一度目を覚まして、ふたたび寝ること。

「みつぶとん」 三つ重ねの敷蒲団。ぜいたくな夜具で、吉原では客が贈る

ものとなっていて、紋日などに飾って見せた。

「郷に流れの身」 廓（遊里）に流れの身。遊女。

「園さ紀野」 その先の。

「むつ言」 睦まじく語ることば。特に、男女の関の中での語らい。

「枘かゞみ」 真澄の鏡。よく澄んで明らかな鏡。

「須磨の若木」 『源氏物語』須磨の巻で、光源氏が須磨に桜の若木を植えた。

「吉左右」 吉事。

六 本文の特色―女流の名寄せ―

『緑増常磐寿』は、正月を言祝ぐ歳旦物の浄瑠璃である。全体としては、常磐津の象徴である松の木に一門の繁栄をかさね、正月の風物や男女の仲睦まじさに因んだ物事を連綿と綴り、夫婦の仲や繁栄の永続を祈る内容となっている。そのような詞章が、常磐津の女流演奏者と推定される約五〇名の名義を寄せ集めて作られていることに大きな特徴と驚きがある。このような詞章の構成は、常磐津正本では他に例をみない。

詞章の右肩に小字で名義が「文字」の二字とよみがなの組み合わせで「文字さの」のように表記され、本文詞章中に名義のよみがなに相当する漢字が「紀野」のように表記される。詞章に詠み込まれているすべての名義を、以下に五十音順に整理して記す。なお、虫損による判読不明部分があるため、正確な人数は未詳であり、ここに漏れている名義も数名あるかもしれない。

あ行 文字朝、文字い□（虫損により未詳）、文字岩、文字枝

か行 文字勝、文字兼、文字菊、文字吉、文字紀野

さ行 文字郷、文字佐野、文字繁、文字菅、文字須磨、文字住、文字園、文字染、文字曾世

た行 文字民、文字周、文字千代、文字継、文字綱、文字常、文字妻、

文字鉄、文字富、文字登女、文字友、文字豊

な行 文字直、文字仲、文字波、文字成

は行 文字花、文字久、文字秀、文字雛、文字房、文字筆、文字保野

ま行 文字松、文字枘、文字美喜、文字美津、文字峰、文字三保、

文字三輪

や行 文字世、文字芳

このうち、経歴が明らかな人は、文字菊だけである。多くの常磐津女流が台頭し、その名義だけでなく経歴を調査の俎上に載せることができるようになるのは幕末以降である〔竹内 二〇一五〕。文字菊は、宝暦八年（一七五八）生まれ、二世常磐津文字太夫の妻女となり、子息に小文字太夫を継がせ、享和元年（一八〇一）に死没〔竹内 二〇一二・二二〕。『緑増常磐寿』出版当時は、二二歳頃であるが、二世文字太夫と婚姻関係にあったかどうかは不明である。

七 書誌

所蔵者は常磐津家元（東京都世田谷区）。整理番号（仮番号）は01・D。

表題（初丁表）および内題（初丁裏）の表記により、書題（曲名）を「緑増常磐寿」とする。いずれの書題にも読み仮名が付けられていないので、仮に「みどります」ときわのことぶき」と読んでおく。

体裁は半紙本一冊、九行二丁、初丁表を表紙に見立てた共紙表紙である。初丁表に常磐津連名と挿絵があり、常磐津の祝儀もの正本の典型的様式といえる。常磐津正本の丁付は、各丁裏の左隅中央部において、丁数のみ、または書題の略称と丁数を彫るのが通例であるが、本書では紙面欠損により、丁付けの有無および表記は不明である。

版元は伊賀屋。巻末の刊記等を含め出版年月は記載されていない。伊賀屋勘右衛門は、初世常磐津文字太夫の時代から幕末まで常磐津正本の出版に関わった版元である。版元住所は併記されていない。伊賀屋が常磐津正本に住所を版刻しなかった期間は限定されており、竹内の正本悉皆調査に基づく考証によれば、明和三年（一七六六）から天明四年（一七八四）頃までと、安

政五年（一八五八）から万延元年（一八六〇）である。

出版年月の表記はみられないが、後述する考証により、出版年月は安永九年（一七八〇）正月と推定される。なお、本書のような歳旦物の正本の巻末には、しばしば刊記があるが、本書の巻末は欠損が大きいいため、刊記の有無については不詳である。

八 出版年月の考証

前述のように、本書には出版年月が明記されていない。三味線方の連名と版元表記の意匠からおおよその年代は推定していたが、決め手が得られず困っていた。

ある日、ねずみと大八車を描いた挿絵を眺めると、いくつかの数字が隠れていることに気がついた。絵を回転させながら観察していくと、たくさんの数字（三・五・七・八・十・十二）が浮かび上がってきた。これは、ひよっとして「絵暦」なのではないだろうかと予想した。

絵暦は、一年間の小の月（二九日間）ないし大の月（三〇日間）を画中に描いたカレンダーのようなものである。江戸期に持てはやされた趣味的な摺物で、「新春」にその交換会が催された。江戸期の暦一覧によると、前述の六つの数字が「小の月」と一致するのは、常磐津創流以後では安永九年（一七八〇）のみである。同年の干支は「庚子」、ねずみ年であるから、挿絵の内容とも符合する。こうして、同年正月の出版物であると推定することができた。

九 筆耕と絵師

次に、「小松川書」および「文朝画」という表記について考察しておく。前者は、書題、連名ないし本文詞章の版下を書いた人物を示し、後者は、挿

絵を描いた人物を示すと推定される。

「小松川書」という表記は、作詞者を示すと想定することも可能かもしれないが、常磐津正本における作詞者の表示は、内題下ないし表紙に見立てた初丁表に「〇〇述」「作者〇〇述」のように記載されるのが通例である。よって、これが作詞者であるとは考えにくい。版下の筆耕者を示す表記は、江戸期刊の常磐津正本での事例は多くないが、「文字太夫直本清書所丈阿」「竹賀写」などがある。

では、小松川とはいったい誰なのか。小松川と称された常磐津関係者は、家元代々の記録集『常磐種』の記述によれば、該当者は二人である。一人は、安永三年（一七七四）に小松川に隠居してからの初世常磐津文字太夫、もう一人は、初世文字太夫夫人まつであるが、天明元年（一七八一）二月に初世文字太夫が死没して以後の呼称である。前述のように、本書の出版年月は、初世文字太夫の存命期にあたる安永九年（一七八〇）正月であると推定されるので、「小松川書」は、隠居中の初世文字太夫に該当すると考えられる。

「小松川書」なる表記の用例は、本書以外の正本では確認できていない。しかし、本書とよく似た書体は、初世常磐津文字太夫が初演した祝儀曲（竹内二〇〇六・三六一三七）の正本にみられる。とくに書題と連名の書体は、本書とよく似ている。楷書体の文字が肉太で、丁寧で素朴な味のある書体であることに特徴がある。初世文字太夫の手跡については、「手跡なども俗筆にあらず、名筆にて有けり」（小川顕道『塵塚談』文化十一年）という逸話も伝わる。このようにみえてみると、この本の版下の文字は、初世文字太夫が自ら筆をとったものと考えてよいのではないだろうか。

次に、初丁表に版刻された「文朝画」について略述する。文朝と名乗った浮世絵師は数名いるが、推定出版年（安永九年）によれば、南竜斎とも号した柳文朝（生没年不詳）であると推定される。文朝は、初世常磐津文字太夫が歌舞伎に出演した時期のうち、宝暦五年（一七五五）頃から明和三年

（一七六六）頃まで、常磐津正本の表紙挿絵を描いている。初世文字太夫および版元伊賀屋との関係性から、本書の挿絵を描いたと推察される。

十 合綴本「鶴式」の概要

本書『緑増常磐寿』は、今回蔵出しされ調査対象とした合綴本八巻中の一卷「鶴式」に含まれる。この合綴本「鶴式」は、本紙全五二丁で、巻頭に白紙一丁、巻末に奥付一丁がある。この奥付は、後述する個々の薄物正本と直接的な関係はなく、伊賀屋刊稽古本の巻末に添付される定型の奥付である。奥付に記載される連名が明和七年（一七七〇）正月「藻塩艸須磨麗夜」薄物正本（常磐津家元所蔵）の連名と一致するので、同じ曲の稽古本の奥付であると考証できる。同じ奥付が添付される同曲の稽古本は、東京藝術大学附属図書館に所蔵される。

合綴本「鶴式」のオモテ表紙には三枚の題簽が貼付される。右上部の題簽は「明和七庚申正月上るりより／天明八申正月狂言迄」、中央下部の題簽は「鶴式」、左下部の題簽は「△元祖文字太夫／二代目文字太夫」薄本式といずれも墨書されている。

合綴本「鶴式」の内容は、常磐津の薄物正本全一三点である。その内訳は、歌舞伎興行で初演時に出版されたいわゆる絵表紙正本が二点、歳旦祝儀曲の正本が一点。全一三点の出版年（開曲年）は、歌舞伎番付等に基づいて考証すると、題簽の記載年月に一致し、明和七年（一七七〇）正月の「藻塩艸須磨麗夜」から天明八年（一七八八）正月の「世尊翼雪解」までとなっている。おおむね、出版年月順に綴じられている。しかし、「緑増常磐寿」と「驟稲葉山松」の二点の配列が考証年月順と異なっており、この合綴本が現状のように合綴された時点ないし改装された際に、この二点の年代考証が不確かであったことが想定される。

まず、全体の三番目に配列される「緑増常磐寿」は、前述した考証によれ

ば安永九年（一七八〇）正月刊と推定されるが、安永二年（一七七三）一月「錦敷色義仲」と同三年（一七七四）一月「文相撲恋の晴業」の合間に綴じられている。もし、綴じた人物が本書の詞章内容に基づいて正月に刊行される歳旦本であることを把握していたとすれば、安永三年正月の刊行と考えていたことになる。

次に七番目に配列される「鞆稲葉山松」は、歌舞伎番付に基づく考証によれば安永四年（一七七五）九月刊と考えられるが、同六年（一七七七）一月「石山寺紅葉錦画」と同八年（一七七九）一月「筒幹色水上」の合間に綴じられている。「鞆稲葉山松」は、常磐津家元に伝存した上演記録集『常磐種 地之巻』に「安永八亥七月十五日」の上演と記されているので、これに基づいて配列されたか、『常磐種 地之巻』の編者と同一人物が配列したのかもしれない。

他巻では、本の所蔵者に関わる書き込みや捺印が確認できる巻があるが、本巻「鶴式」においてはそれらは確認できない。また、「鶴壺」と題する合綴本の存在は確認できていない。本巻と他巻との関連性については、別の機会に報告したい。

十一 おわりに

従来、常磐津節の歴史において、日本音楽史において、女流演奏家がたくさん台頭して活躍を始めるのは、幕末頃からであると考えられていた。しかし、この史料が発見されたことによって、歴史的認識を変えなければならぬ。一七〇〇年代後期の安永期において、すでに日本音楽の伝承は、男性のみならず、多くの女性によっても担われていたのである。

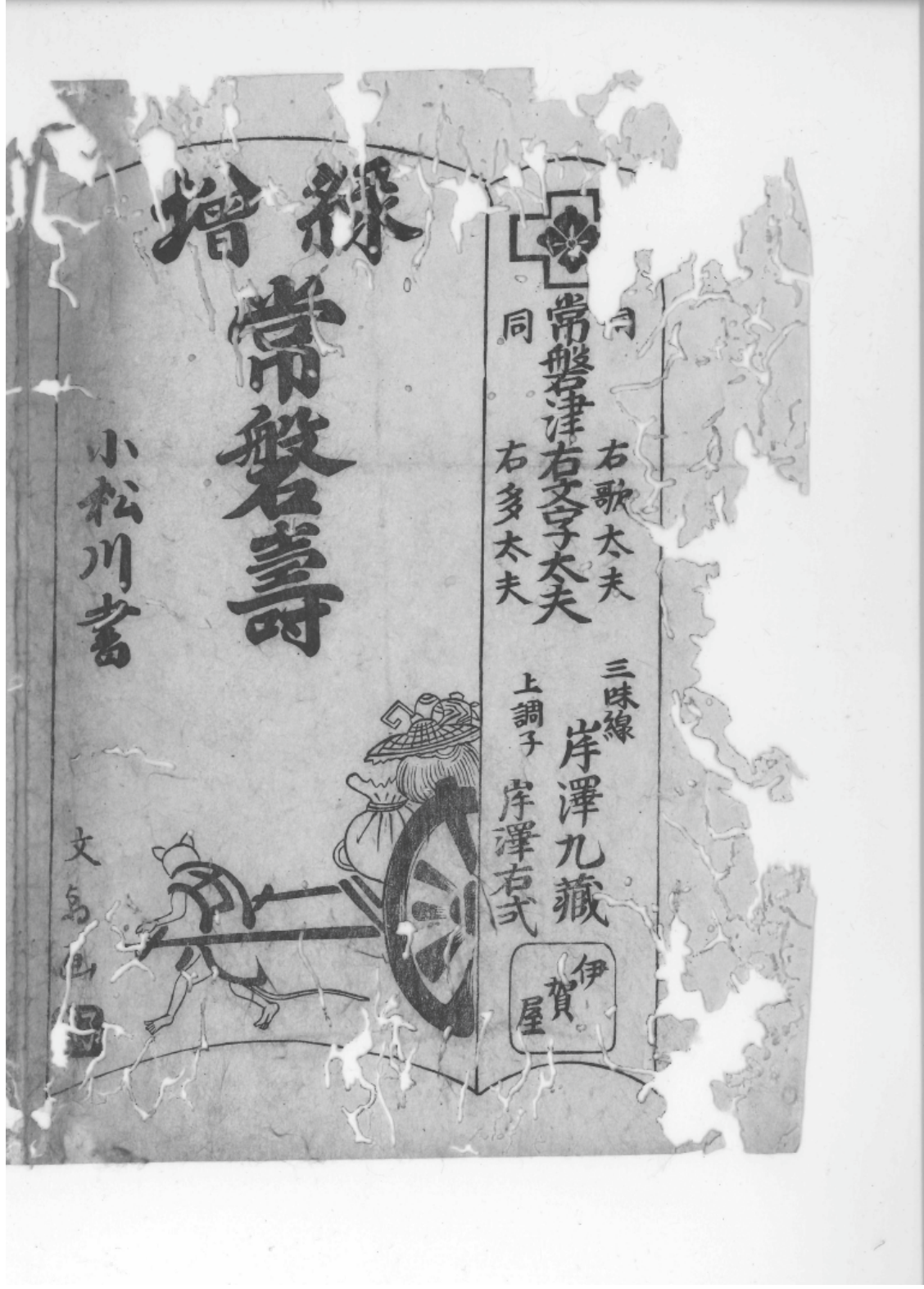
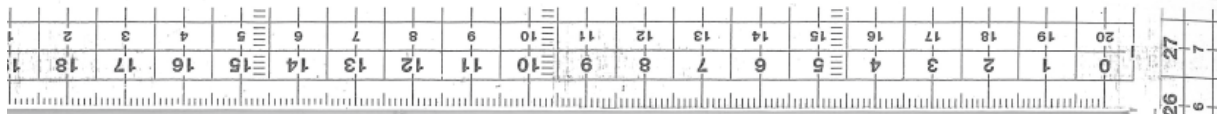
浄瑠璃方の連名に見える「右文字太夫」という名義は、これまで確認されたことのない初出の名義である。初世常磐津文字太夫をはじめ、当時の常磐津界の情勢の中で、この名義を名乗った人物とその意義を考察することによ

り、常磐津節の歴史的研究に新たな一ページを提供することができらう。これについては別の機会に述べることとしたい。

参考文献

- 竹内有一 二〇〇六 「初世文字太夫正本の刊行と曲節譜」『日本伝統音楽研究』3。
竹内有一（編著）二〇一二 『常磐津節演奏者名鑑第1巻 近世1…創流期から幕末期までの太夫方』（常磐津節演奏者の経歴に関する調査報告書二〇一一年度）、九世常磐津文字太夫監修、常磐津節保存会。
竹内有一（編著）二〇一五 『常磐津節演奏者名鑑第4巻 近代2…女流演奏者』（常磐津節演奏者の経歴に関する調査報告書二〇一四年度）、九世常磐津文字太夫監修、常磐津節保存会。

※本研究はJSPS科研費JP17K02284の助成を受けたものです。



緑
常磐名壽

小松川書

文島

同
右歌太夫
常磐津右文字太夫
右多太夫

三味線
岸澤九藏
上調子
岸澤右式

伊賀屋



19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----



